

20.4.2004

日本国特許庁  
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日 2003年 4月21日  
Date of Application:

出願番号 特願2003-116393  
Application Number:  
[ST. 10/C]: [JP2003-116393]

出願人 橋本 健二  
Applicant(s):

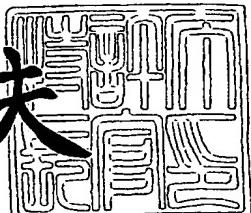
REC'D	10 JUN 2004
WIPO	PCT

PRIORITY DOCUMENT  
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN  
COMPLIANCE WITH  
RULE 17.1(a) OR (b)

2004年 5月27日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

今井康夫



【書類名】 特許願  
【整理番号】 ODS1501P  
【提出日】 平成15年 4月21日  
【あて先】 特許庁長官殿  
【発明者】  
【住所又は居所】 宮崎県宮崎市小松台西一丁目5番地10  
【氏名】 橋本 健二  
【特許出願人】  
【識別番号】 503129464  
【氏名又は名称】 橋本 健二  
【代理人】  
【識別番号】 100116687  
【弁理士】  
【氏名又は名称】 田村 爾  
【手数料の表示】  
【予納台帳番号】 122689  
【納付金額】 21,000円  
【提出物件の目録】  
【物件名】 明細書 1  
【物件名】 図面 1  
【物件名】 要約書 1  
【プルーフの要否】 要

**【書類名】明細書**

**【発明の名称】**生分解性シート及びその製造方法、並びに当該シートを用いた生分解性成型品及びその製造方法

**【特許請求の範囲】****【請求項 1】**

澱粉質を70重量%以上含有する原料から、温度を120～140℃に保持しつつ成形してなる生分解性シート。

**【請求項 2】**

請求項1に記載の生分解性シートにおいて、該原料は、更にプラスチックを含有することを特徴とする生分解性シート。

**【請求項 3】**

澱粉質の含量が70重量%以上となるように、澱粉質及びプラスチックを混練し、当該混練物を押出成形した後、裁断することにより原料ペレットを形成し、該原料ペレットを乾燥させ、その後加熱しつつ均一に混合することにより融解し、当該融解物を温度120～140℃で、シート状に成形する工程を含むことを特徴とする生分解性シートの製造方法。

**【請求項 4】**

請求項3に記載の生分解性シートの製造方法において、原料ペレットの水分含有量が2重量%以下となるように原料ペレットを乾燥させることを特徴とする生分解性シートの製造方法。

**【請求項 5】**

請求項1又は2に記載の生分解性シートを、加熱真空成形することにより得られる生分解性成型品。

**【請求項 6】**

請求項5に記載の生分解性成型品において、該生分解性シートの厚みは、0.2～0.8mmであることを特徴とする生分解性成型品。

**【請求項 7】**

請求項5又は6に記載の生分解性成型品において、該成型品は、機械的強度を高めるための溝及び／又は突起が設けられていることを特徴とする生分解性成型

品。

#### 【請求項8】

請求項5乃至7のいずれかに記載の生分解性成形品において、該生分解性成形品が、澱粉質を養分とする菌を含む食品を収容する容器であることを特徴とする生分解性成形品。

#### 【請求項9】

請求項1又は2に記載の生分解性シートを少なくとも1枚積層させ、該シートの軟化点温度まで加熱した状態で、真空型抜きすることにより生分解性成形品を形成することを特徴とする生分解性成形品の製造方法。

#### 【請求項10】

請求項9に記載の生分解性成形品の製造方法において、該軟化点温度は、115～130℃であることを特徴とする生分解性成形品の製造方法。

#### 【発明の詳細な説明】

##### 【0001】

##### 【発明の属する技術分野】

本発明は、生分解性シート及びその製造方法、並びに当該シートを用いた生分解性成形品及びその製造方法に関し、特に、燃焼させてもダイオキシン等の有害物質を発生せず、生分解性に優れるため環境問題にも有効な生分解性シート及びその製造方法、並びに当該シートを用いた生分解性容器及びその製造方法に関する。

##### 【0002】

##### 【従来の技術】

現在、広く利用されているプラスチック製品は、廃棄されると自然界中で分解することが難しく、通常、分解には200～400年もの歳月が必要とされる。また焼却処分する場合には、ダイオキシンなどの有毒ガスを発生し、大気・土壤汚染の原因となっていた。

##### 【0003】

これに対し、自然界中で生物により分解可能である、従来のプラスチック製品に代わる材料及びそれを用いた成形品が切望されている。

特開平6-32386号公報においては、生分解性に優れた澱粉に着目し、断熱性や耐水性を改善するため、穀物、澱粉、植物性蛋白質、及び纖維質の粉状物、該粉状物からの造粒物、並びに穀物粒から選ばれる少なくとも1つからなる原料を、密閉成形型に入れ、加熱した後減圧し結着させ、容器状に成形する、生分解性発泡容器の製造方法が開示されている。

また、澱粉とプラスチック等の樹脂とを混合した澱粉樹脂として、特開平9-296076号公報においては、コーンスタークあるいはポテトスタークあるいはその他の澱粉40~80%、脂肪5~15%、水0.5~2%、ポリプロピレン又はポリエチレンあるいはその他のプラスチック3~10%、グリセリン1~5%、蛋白質2~8%、及びエチレンメタクリル酸ないしエチレンアクリル酸10~25%を配合してなる、生分解性可能な澱粉樹脂が開示されている。また、容器等の成型品の製造方法としては、直接射出成形する方法が提案されている。

#### 【0004】

しかしながら、特開平6-32386号公報のように澱粉質を多く含む原料から得られる容器等の成型品は、澱粉質間の結着力がプラスチックなどと比較して弱く、十分な機械的強度を得るためにには、容器の厚みが増し、使用する材料も多くなるためコスト的に高価なものとなる。

また、澱粉質を多く含む原料を直接密閉成形型に入れて成形するためには、澱粉質が多く含まれるため、粘性が高く、高温になると変色・発泡が発生し、安定した成型品が得られ難いという欠点を有する。

#### 【0005】

また、特開平9-296076号公報のように澱粉樹脂を利用する場合には、射出成形で容器等を成形するに際し、強度を保つため澱粉質を50重量%程度に抑える必要がある。しかしながら、澱粉質の含有量の低下は、自然界中の分解速度を低下させ、焼却した場合のダイオキシンの発生量の増加や焼却温度の上昇等の問題を生じる。また、澱粉質を含有しているため、射出成形時の温度管理が難しく、粘性も高くなるため、製造設備の高コスト化や、量産化が困難となるなどの問題を招く。

#### 【0006】

**【発明が解決しようとする課題】**

本発明の課題は、上述した問題を解決し、澱粉質の含有量が70重量%以上、好ましくは75～85重量%以上と高く、生分解性に優れると共に、成形性も良好な、生分解性シート及び当該シートを用いた生分解性成型品を提供し、しかも簡易かつ経済的な製造方法も提供することである。

**【0007】****【課題を解決するための手段】**

上記課題を解決するために、請求項1に係る発明では、澱粉質を70重量%以上含有する原料から、温度を120～140℃に保持しつつ成形してなる生分解性シートであることを特徴とする。

また、好ましくは、請求項2に係る発明のように、請求項1に記載の生分解性シートにおいて、該原料は、更にプラスチックを含有することを特徴とする。

**【0008】**

請求項1に係る発明のように、澱粉質を70重量%以上、好ましくは75重量%～85重量%含むため、極めて生分解性が良く、しかも、該原料を120～140℃に保持しながら、シート状に成形しているため、澱粉質の熱的変性による変色や発泡を抑え、均一なシートを得ることが可能となる。

しかも、澱粉質以外にはプラスチックを含有させているため、成形時の適度の流動性や成形後の結着性を確保することが可能となる。

**【0009】**

また、請求項3に係る発明は、澱粉質の含量が70重量%以上となるように、澱粉及びプラスチックを混練し、当該混練物を押出成形した後、裁断することにより原料ペレットを形成し、該原料ペレットを乾燥させ、加熱しつつ均一に混合することにより融解し、当該融解物を温度120～140℃で、シート状に成形する工程を含むことを特徴とする生分解性シートの製造方法である。

そして、好ましくは、請求項4に係る発明のように、請求項3に記載の生分解性シートの製造方法において、原料ペレット中の水分含有量が2重量%以下となるように乾燥させることを特徴とする。

**【0010】**

請求項3に係る発明のように、澱粉質を含む原料をペレット状に成形し、該ペレットを融解してシートを形成するため、原料ペレットを成形する工程と、シートを成形する工程等が分離でき、各工程の管理が容易になると共に、製造拠点の分散化も可能となるため、生産性の向上及び製造リスクの分散、製造コストの低減が実現できる。

また、原料ペレットにおいては、澱粉質やプラスチックが均一に混合されており、シートの生産量が変動しても、原料ペレットの供給量を調整することにより、常に均質なシートを製造することができる。しかも、請求項4に係る発明のように、原料ペレットを乾燥させる工程を経ることにより、含有水分量を調整でき、必要に応じて融解時に添加する結着剤の特性とも相まって、特性の安定した生分解性シートを製造することが可能となる。

#### 【0011】

また、請求項5に係る発明は、請求項1又は2に記載の生分解性シートを、加熱真空成形することにより得られる生分解性成型品である。

特に、請求項6に係る発明のように、請求項5に記載の生分解性成型品において、該生分解性シートの厚みは、0.2～0.8mmであることを特徴とする。

しかも、請求項7に係る発明のように、請求項5又は6に記載の生分解性成型品において、該成型品は、機械的強度を高めるための溝及び／又は突起が設けられていることを特徴とする。

また、好ましくは、請求項8に係る発明のように、請求項5乃至7のいずれかに記載の生分解性成型品において、該生分解性成型品が、澱粉質を養分とする菌を含む食品を収容する容器であることを特徴とする。

#### 【0012】

請求項5に係る発明のように、澱粉質を多く含むため粘性の高くかつ温度管理が難しい原料であっても、生分解性シートから加熱真空成形することにより、プラスチック製シートで多用されている加熱真空成形機を用いて、容易に均質な成型品を得ることが可能となる。

また、生分解性シートから成型品を形成するため、密閉成形型入・圧縮成形や、射出成形などと比較しても、請求項6に係る発明のように、0.2～0.8m

mの薄いシートを引き延ばして成形することが可能となるため、原料の消費量を抑制し、低コスト化を達成することが可能となる。

しかも、成型品の厚みを薄くすることで、脆弱となる機械的強度を補強するため、請求項7に係る発明のように、溝又は突起を設けることで容易に、強度を高めることが可能となる。

さらに、原料として澱粉質を多く含むため、従来のプラスチック製成型品と比較して、通気性が高く、澱粉質を養分として供給することも可能となるため、請求項8に係る発明のように、納豆菌などのように澱粉質を養分をして取り込む特性のある菌を生きたまま含有している食品を収容する容器として利用することにより、プラスチック製成型品より長期に渡り、生きた菌を含有する食品を提供することが可能となる。

#### 【0013】

また、請求項9に係る発明は、請求項1又は2に記載の生分解性シートを少なくとも1枚積層させ、該シートの軟化点温度まで加熱した状態で、真空型抜きすることにより生分解性成型品を形成することを特徴とする生分解性成型品の製造方法であり、特に、請求項10に係る発明では、請求項9に記載の生分解性成型品の製造方法において、該軟化点温度は、115～130℃であることを特徴とする。

#### 【0014】

請求項9に係る発明により、生分解性シートを、1枚又は所望する厚さになるまで積層し、該シートが軟化する温度まで加熱した状態で、真空型抜きすることにより、均質な厚みを保持しながら必要な形状に加工することが可能となる。特に、澱粉質が70重量%以上含有するシートにおいては、115～130℃の範囲に軟化点温度が存在し、115℃より低い温度では、生分解性シートの軟化が不十分であるため、均質に引き伸ばして所要の形状を形成することが困難であり、130℃より高い温度では、生分解性シートが変色するなどの弊害が発生することとなる。

#### 【0015】

##### 【発明の実施の形態】

以下、本発明を好適例を用いて詳細に説明する。

本発明で用いる澱粉質としては、本発明に係る生分解性成型品が、食品に関連するものとして使用されることもあることから、利用者の安全性を考慮する観点から、天然物由来の澱粉質が望ましいが、必要に応じて、加工（変性）澱粉、及びこれらの混合物を使用することも可能である。澱粉質の原料としては、トウモロコシ、馬鈴薯、甘藷、小麦、米、タピオカ、サゴ、キャッサバ、豆、葛、ワラビ、蓮、ヒシなどが利用できるが、特に原材料が安く大量に入手できる点から、トウモロコシがより好ましい。

#### 【0016】

加工澱粉としては、天然澱粉に種々の物理的変性を行ったもの、例えば、 $\alpha$ -澱粉、分別アミロース、湿熱処理澱粉等や、天然澱粉に種々の酵素変性を行ったもの、例えば、加水分解デキストリン、酵素分解デキストリン、アミロース分解澱粉、アミロペクチン分解澱粉等、天然澱粉に種々の化学処理をしたもの、例えば、酸処理澱粉、次亜塩素酸酸化澱粉、酸化処理を行ったジカルボン酸澱粉、アシル化を行ったアセチル澱粉、その他の化学変性澱粉誘導体、例えば、エステル化処理を行ったエステル澱粉、エーテル化処理を行ったエーテル化澱粉、架橋剤で処理した架橋澱粉、2-ジメチルアミノエチルクロライドでアミノ化したようなカチオン化澱粉等がある。エステル化澱粉としては、酢酸エステル化澱粉、コハク酸エステル化澱粉、尿素リン酸エステル化澱粉、キサントゲン酸エステル化澱粉、アセト酢酸エステル化澱粉等、エーテル化澱粉としては、アリルエーテル化澱粉、メチルエーテル化澱粉、カルボキシメチルエーテル化澱粉、ヒドロキシエチルエーテル化澱粉、ヒドロキシプロピルエーテル化澱粉等、カチオン化澱粉としては、澱粉と2-ジメチルアミノエチルクロライドや2-ジエチルアミノエチルクロライドの反応物、澱粉と2, 3-エポキシプロピルトリメチルアンモニウムクロライドの反応物など、架橋澱粉としては、ホルムアルdehyド架橋澱粉、アルdehyド架橋澱粉、ジアルdehyド架橋澱粉、エピクロルヒドリン架橋澱粉、リン酸架橋澱粉、アクロレイン架橋澱粉などがある。

#### 【0017】

本発明では、澱粉質にプラスチック等の樹脂を混合した、いわゆる澱粉樹脂を

原料として用いている。これは、澱粉質のみの原料に更に、耐水性、耐熱性、機械的強度、加熱成形時の流動性等を付与するために混合されるものであり、好ましくは、原料中10～30重量%、さらに好適には15～25重量%となるよう混合する。

澱粉質に混合するプラスチックとしては、ポリエチレン系樹脂、ポリプロピレン系樹脂、ポリブチレン系樹脂、ポリ塩化ビニル系樹脂、ポリアクリルまたはポリメタクリル系樹脂、ポリアクリロニトリル系樹脂、ポリスチレン系樹脂、ステンーアクリロニトリル共重合体、ステンープタジエンーアクリロニトリル共重合体、ポリカーボネート系樹脂、ポリエステル系樹脂またはリサイクルポリエステル系樹脂、ポリアミド系樹脂、ポリアセタール系樹脂等、前記樹脂の1種ないし2種以上を混合して使用することができる。本発明では、特に、成形時の強度を高めるため、ポリプロピレンを好適に使用できる。

#### 【0018】

次に澱粉質とプラスチックなどの原料から直接、生分解性シートや生分解性成型品を製造することも可能であるが、本発明に係る生分解性のシートや成型品は、澱粉質を70重量%、好ましくは75～85重量%含有するため、温度管理が難しい。しかも、原料からこれらの製品を直接製造する場合には、製造設備が大型化するだけでなく、製造設備・ラインを特別に設計する必要があるため、極めて高コストなものとなる。このため、従来のプラスチック製シートや容器などの製造ラインを再利用する観点から、まず、原料を均一に混合した原料ペレットを製造し、該原料ペレットを必要な量だけ融解させて、生分解性シートを形成している。

#### 【0019】

また、生分解性成型品については、原料ペレットを融解して、射出成型することも可能ではあるが、高濃度の澱粉質を有する原料のため、温度管理の難しさや高い粘性のため、厚みが薄くかつ均質な成型品を得るには、一旦、シート状に加工した上で、該シートを軟化し、真空型抜き成型する方法が、より低成本で良質な製品を得ることができる。

さらに、原料から原料ペレットを、次いで該原料ペレットを用いて生分解性シ

ートを、そして該生分解性シートを用いて生分解性成形品を製造するというよう  
に、製造工程を複数のプロセスに分離することにより、製造工程の管理が容易に  
なると共に、製造拠点の分散化も可能となるため、生産性の向上及び製造リスク  
の分散、製造コストの低減が実現できる。

#### 【0020】

原料ペレットの製造方法としては、原料である澱粉質とプラスチック等を均一  
に混合し、製造された原料ペレットが、通常の保管・搬送状態でも、形状や特性  
を維持することが可能となる方法であるなら、公知の混練や融解による混合方法  
が利用可能である。

ただし、澱粉質の温度管理を適正に行う観点から、エクストルーダなどの温度  
制御が容易にできる混練機械を利用した方法が、より望ましい。

#### 【0021】

エクストルーダを用いた原料ペレットの製造方法の好適例を説明すると、製造  
機械は、互いに内向きに旋回する二軸のエクストルーダを利用し、原料供給タン  
クを少なくとも一つ、望ましくは二つ以上、該軸の方向に配置する。例えば、第  
1の供給タンクからは澱粉質を、第2の供給タンクからはプラスチックを、各々  
供給すると共に、二軸のエクストルーダにより、原料を粉碎、混練しながら軸方  
向に搬送する。また、各供給タンクは温度制御がされており、澱粉質は、大気温  
度、プラスチックは100～160℃程度に保持される。原材料の時間当たりの  
供給量は、エクストルーダの一端側から押し出される粘稠状の原料混合物におけ  
る原料の割合が、澱粉質が70重量%以上、好ましくは澱粉質が70～90重量  
%で、プラスチックが10～30重量%の範囲となるように、各供給タンクの供  
給量を調整する。

エクストルーダから押し出される粘稠状の原料混合物を、冷却し、所定の長さ  
に裁断して、原料ペレットを形成する。

#### 【0022】

次に、澱粉質生分解性シートの製造方法について説明する。

また、澱粉質は、とうもろこし等の澱粉質を製造する原料から澱粉質を取り出  
す調製をする際、上記原料ペレットを製造する際、さらには保管している際に、

水分を含有したり、空気中の水分を吸湿したり、澱粉質は、湿気を含み易い性質があるため、原料ペレットを乾燥させる。乾燥方法としては、熱風乾燥など公知の技術が利用可能である。好適には、原料ペレット中の水分含有量が2重量%以下となるように、即ち、可能な限り水分量が少なくなるように、乾燥させることが望ましい。

次いで、乾燥させた原料ペレットを融解させ、好適には180℃程度の温度で融解させ、エアー冷却しながら、融解物の温度を120～140℃、好ましくは124～127℃に維持し、二軸ローラを利用してシート状に成形する。その後、シートを空気又は自然冷却により冷却、好ましくは60℃以下に冷却し、ロール状に巻き取る。シート形成時の延伸用ローラは、一軸ローラでも可能であるが、一軸の場合は、駆動ローラの負担が大きく温度上昇を招き、生分解性シートの発泡、変色の原因となる場合もあるため、二軸ローラを用いることが好ましい。融解時の温度が200℃、特に220℃を超えると、溶融用容器内で、澱粉質が硬化・発泡し、均質なシートを形成すること難しくなる。また、シート形成時の温度が140℃を超えると、形成されたシートに気泡の発生が目立ち、また、一旦温度が下がり再度上昇すると、変色が発生し易くなる。さらに、120℃より低い温度では、融解した原料の粘性が高く、均質な厚み・密度を有するシートが形成できない。

### 【0023】

更に、必要に応じて、原料ペレットの融解時に結着剤を添加しても良い。結着剤は、シート状に成形した際の、澱粉質間又は澱粉質とプラスチックとの結着性能を高め、形状保持性を向上させることを目的として使用される。かかる結着剤を添加することにより、シート成形後の引張強度等の機械的強度が増加し、生分解性シートの取扱い、及び、生分解性成型品に再加工する際の、製造工程における搬送作業等を安定的に行うことが可能となり、更に、シート状態での長期保管も可能となる効果を更に、増大させることができる。

かかる結着剤としては、原料ペレット中に含まれるプラスチックと同様の高分子樹脂を使用することができるが、成形強度を高める点から、ポリプロピレンが好適に使用できる。

また、生分解性シートの耐水性や吸湿防止、また保存時の変色防止などを目的として、種々の添加剤を添加することも可能である。結着剤や添加剤の添加量は、シート状に成形した際のシート中の澱粉質の含有量が70重量%以上、好ましくは75～85重量%となる範囲であれば、任意に調整可能であるが、原料ペレットから乾燥工程で減少した水分量に相当する量を添加するように構成することが、望ましい。

このような製造方法により、1mm以下の汎用性の高い均質な生分解性シートが形成でき、特に、0.005mm程度までは、均質な生分解性シートの形成が可能であることが確認されている。また、後述する生分解性成型品に利用するものとしては、生分解性シートの厚みが0.2～0.8mm程度が好ましい。

#### 【0024】

次に、生分解性成型品の製造方法について説明する。

生分解性シートは、加熱ヒータ中を搬送される際に、該シートの軟化点温度まで上昇させられ、成型品に対応した金型で型抜き成形される。特に、容器などの均一な厚みを必要とする成型品を製造する際には、真空型抜き成形が好ましく、その際には、メス金型に真空吸着されると共に、該メス金型と嵌合するオス金型により、型抜きを行い、そしてメス金型に吸着した状態で、急速に60℃以下に冷却される。この際の真空の程度は、型抜き成形が実施できれば特に限定されないが、例えば、その程度をメス型の吸引量で表すと、40m<sup>3</sup>/時～200m<sup>3</sup>/時であることができる。さらに、シートに対して上方にメス金型を、下方にオス金型を配置し、メス金型では空気を吸引すると共に、オス金型側から空気を送風するよう構成する。これにより、軟化したシートに空気を吹き付けながらシートを押し上げ、メス金型の吸引力によりシートをメス金型の壁面に吸着させ、シートを適切に引き伸ばしながら、均質な厚みの容器を形成する。

#### 【0025】

上記の製造方法によれば、例えば、容器の深さが10～60mm程度のものである場合には、1mm以下、好ましくは0.2～0.8mm、より好ましくは0.4～0.5mm程度の厚みの生分解性シートを利用することにより、容易に均質な容器を形成することが可能となる。

上記説明では、生分解性シートを1層で利用する方法を説明したが、該シートを2層以上積層し、上述した方法と同様に、該シートの軟化点まで加熱し、型抜き成型することも可能である。

さらに、成形品の成形時に、型抜きで残ったバリについては、溶融することにより再生分解性シートの原料とすることが可能であるため、生分解性シートの製造工程に還元し、再利用することも可能である。

### 【0026】

成形品形成時の生分解性シートの軟化点温度について説明する。図1は、本発明に係る生分解性シートの軟化点温度を測定したものである。

実験で使用した生分解性シートは、澱粉質が80重量%、ポリプロピレンが28重量%、必要に応じて添加した結着剤としてのポリプロピレンが2重量%のものであり、シートの厚みが0.5mmである。

測定方法としては、示差走査熱量測定方法（DSC3100；MAC SCI ECE社製）を利用し、毎分1°Cで温度を上昇させながら、1秒毎の吸熱速度の変化を測定したものである。

図1のグラフが示すように、116～124°C付近に軟化点が存在し、本発明に係る澱粉質を多量に含む生分解性シートは、主として115～125°Cに軟化点が存在する。

また、本発明に係る生分解性シートは、軟化点における吸熱速度が、ポリプロピレンなどより1.5倍程度高いため、通常のプラスチック製成品の製造と比較しても、より厳密な温度管理が必要であることが理解される。

### 【0027】

生分解性成形品としては、食品などの包装に利用される使い捨て容器や、使い捨てフォークやスプーンなどの食器、各種梱包に利用されるスペース材やクッション材として利用することも可能である。また、生分解性シートを薄く成形し、熱融着などをを利用して、ごみ袋や包装袋、使い捨て衣類などを形成することも可能である。

厚みが薄く、立体的形状を必要とする生分解性成形品においては、上述したように、一旦、生分解性シートを形成し、該シートを加熱真空型抜きすることによ

り、成形品全体にわたり均質な厚みの成形品を得ることが可能となる。特に、厚みの薄い容器を形成することにより、原材料の消費を抑え、低コスト化できると共に、廃棄した場合でも、ゴミの容量を抑え、生分解の速度も速くなるなど、極めて有用な効果を得ることができる。

#### 【0028】

図2は、本発明に係る生分解性成形品の一つである、使い捨て容器を示す図である。

図2(a)は、容器の上方から見た図であり、図2(b)は、図2(a)の一点鎖線A, Bにおける断面形状を示すものである。

容器の厚みを減少すると、容器側面の機械的強度が減少するため、従来のプラスチック製容器と同様に取り扱うことが困難となる。このため、機械的強度を高めるため、容器の側面に溝又は突起を形成することが、好ましい。

#### 【0029】

図2は、縦横の長さが約80～100mm、深さ約30mm程度の容器1であるが、該容器を0.5～1mmの生分解性シートを加熱真空型抜きで形成すると共に、幅1～2mm程度、深さ1mm程度の溝を、図2(a)に示すように、容器1の側面及び底面に、符号2～4のように形成することにより、通常のプラスチック(ポリプロピレン)製容器と同等の機械的強度が確保できた。

溝は、機械的強度を強化すべき面に形成することで、ある程度の改善が期待できるが、容器の立体形状に対する変形を防止するためには、図2(a)のように、少なくとも連続する2つの面に渡る共通の溝2～4を形成することが、好ましい。また、溝同士を符号3のように交差させることにより、溝同士の機械的結合力も高めることができとなり、より強度の高い容器が形成できる。さらに、溝の交差点に、該溝より高い又は広い形状を有する突起5を形成することにより、溝同士の結び付きをより強固にすることが可能となる。

#### 【0030】

本発明に係る生分解性シートや生分解性成形品は、廃棄されても自然分解し、環境への負荷の軽減に役立つものであるが、それ自体が澱粉質を多量に含むため、澱粉質を養分とする菌が含まれる食品を、上述した生分解性容器で包装することにより、食品の保存性が向上する。

とにより、菌を生きた状態で流通・保存することが可能となる。

例えば、納豆菌、パン酵母菌、乳酸菌、麹菌などのように、食品の製造過程だけでなく、納豆、パン生地、乳酸食品、酒類など、流通過程でも菌を生きた状態に保つことが必要な食品においては、特に、本発明に係る生分解性容器は、利用価値が高いものである。

### 【0031】

#### 【実施例】

以下、本発明に係る実施例について説明する。

##### (実施例1)

原料として、トウモロコシ澱粉質70重量%、ポリエチレン30重量%を、二軸のエクストルーダにより混練し、エクストルーダから押し出される原料混合物を、0.5～5mmの長さに裁断して、原料ペレットを形成した。

原料ペレットを、熱風を当てながら、水含有量が0.02重量%となるまで乾燥させた。乾燥した原料ペレットに、結着剤としてポリプロピレンを、上記ポリエチレンとの合計重量が30重量%となるように添加して、180℃で融解し、融解した原料を、空気冷却により125℃に下げながら二軸ローラにより、厚さ0.5mmの生分解性シートを形成した。

### 【0032】

#### (材質及び溶出試験)

実施例1の試料について、「合成樹脂製の器具又は容器包装規格試験（ポリエチレン）」（厚生省告示第20号）に基づき、材質試験及び溶出試験を実施した。結果は、次のとおりであり、実施例1の試料が上記規格に適合するものであることがわかる。

##### ・材質試験

カドミウム・・・・1ppm未満（規格基準100ppm以下）

鉛・・・・・・・10ppm未満（同100ppm以下）

##### ・溶出試験

重金属（Pbとして）・・・1ppm未満（同1ppm以下）

過マンガン酸カリウム消費量・・・1ppm未満（同10ppm以下）

蒸発残留物（n-ヘプタン浸出）・・・7 ppm（同30 ppm以下）

同（20%エタノール浸出）・・・5 ppm未満（同30 ppm以下）

同（水浸出）・・・5 ppm未満（同30 ppm以下）

同（4%酢酸浸出）・・・6 ppm（同30 ppm以下）

### 【0033】

(生分解性シートの物性試験)

実施例1の生分解性シートについて、「ポリエチレン分解性地膜シート」（Q／12XT3832-99）に基づき試験を行った。試験結果を表1に示す。

引張り強度や断裂伸張率は、試料を鉄アレー型に成形し、幅は10mm、有効長さは40mm、試料全長は120mm、試験速度は500±50mm/分とし、5つのサンプルを試験した平均値を示している。

また、直角に亀裂を入れた試験では、試験速度を200±20mm/分とし、破断時の最大値を測定した。

### 【0034】

【表1】

試験項目	単位	標準要求	測定結果	判定
引張強度(縦)	N	≥1.0	1.9	合格
引張強度(横)	N	≥1.0	1.2	合格
断裂伸率(縦)	%	≥100	412	合格
断裂伸率(横)	%	≥100	680	合格
直角に破って 引張強度(縦)	N	≥0.4	0.6	合格
直角に破って 引張強度(横)	N	≥0.4	0.9	合格

### 【0035】

(生分解性シートの分解性能試験)

実施例1と同様に生分解性シートを製造する際に、澱粉質の含有量を0～80重量%の範囲で変化させ、シートの厚さを0.5mmとなるように成形した試験体を用いて、「プラスチック、微生物行為の判定」（ISO846）に基づき試験を行った。試験結果を表2に示す。

ただし、試験期間は30日であり、使用した菌は、黒曲菌である。

菌の繁殖面積と繁殖レベルとの関係は、次のとおりである。

繁殖レベル 0：無繁殖

同レベル 1：目で確認できなく顕微鏡の下で見える状態。

同レベル 2：目で確認できる繁殖面積が 25% 未満

同レベル 3：目で確認できる繁殖面積が 50% 未満

同レベル 4：はっきり繁殖することを確認できる繁殖面積が 50% 超

同レベル 5：大量に繁殖し繁殖面積が 100% のもの

### 【0036】

【表2】

澱粉質含有量：重量%	菌の繁殖した面積%	菌の繁殖レベル
0	0	0
20	22	2
30	45	3
40	90	4
60	100	5
80	100	5

### 【0037】

上記試験結果により、本発明に係る生分解性シートは、衛生的に極めて安全であることがわかる。しかも、機械的特性がポリエチレン製シートと同等以上であり、生分解性も優れたものであることが理解される。

特に、生分解性においては、澱粉質を 60 重量% 以上含むものにおいては、菌の繁殖面積も全体におよび、極めて良好な生分解性能を示すことが確認できる。

### 【0038】

(実施例 2)

次に、ポリエチレンをポリプロピレンに代えた以外は、実施例 1 と同様な製造方法により、厚さ 0.5 mm の生分解性シートを形成し、該シートを 1 枚 120 °C に加熱して軟化させ、真空型抜き成形により、図 2 に示すような生分解性容器を成形した。

### 【0039】

(生分解性容器の強度試験)

実施例 2 の生分解性容器を、ポリプロピレン製容器の代わりとして、納豆製造ライン（納豆を容器に入れると共に、容器上面をフィルムで封止する作業を自動

化した生産ライン)で使用したところ、容器の凹みや、傷・ひび割れ・へこみ等の発生が無く、従来のポリエチレン製容器と同等の機械的強度を有していることが確認された。

#### 【0040】

##### (生分解性容器の菌含有食品の保存性試験)

また、実施例2の生分解性容器と通常のポリエチレン製容器に、各々納豆食品を入れ、フィルムで封止し、常温における保存状態を確認した。

ポリエチレン製容器においては、2週間で、納豆が黒色に変色し、納豆菌の多くが死滅していることが確認されるが、生分解性容器においては、1ヶ月経過後においても、納豆菌が生きており、しかも粘り気が増加しており、菌の繁殖が進んでいることが確認された。

#### 【0041】

##### 【発明の効果】

以上説明したように、本発明によれば、生分解性に優れると共に、成形性が良好な生分解性シートや該シートを利用した生分解性成型品を提供することが可能となる。

しかも、簡易かつ経済的な生分解性シート及び該シートを利用した生分解性成型品の製造方法も提供することができる。

##### 【図面の簡単な説明】

【図1】本発明に係る生分解性シートの吸熱速度変化を示す線図。

【図2】本発明に係る生分解性容器一例の上面図(a)及び断面図(b)。

##### 【符号の説明】

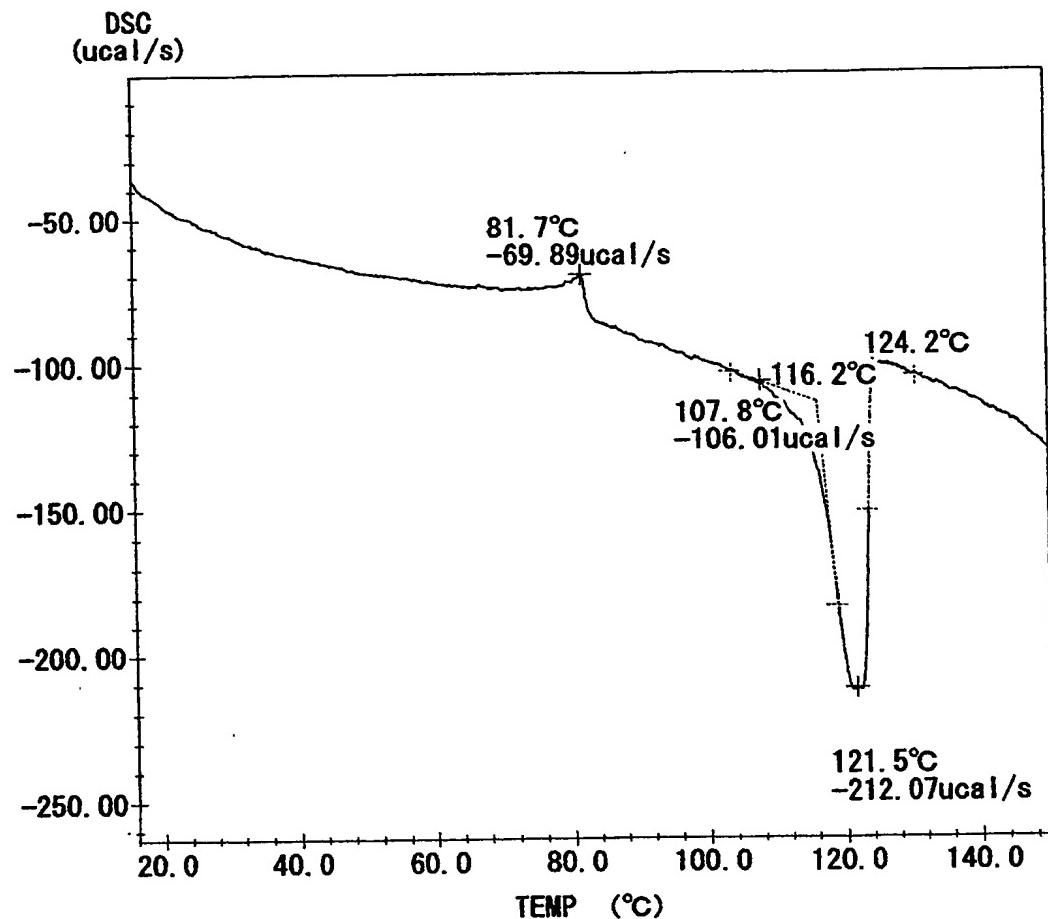
1 生分解性容器

2, 3, 4 溝

5 突起

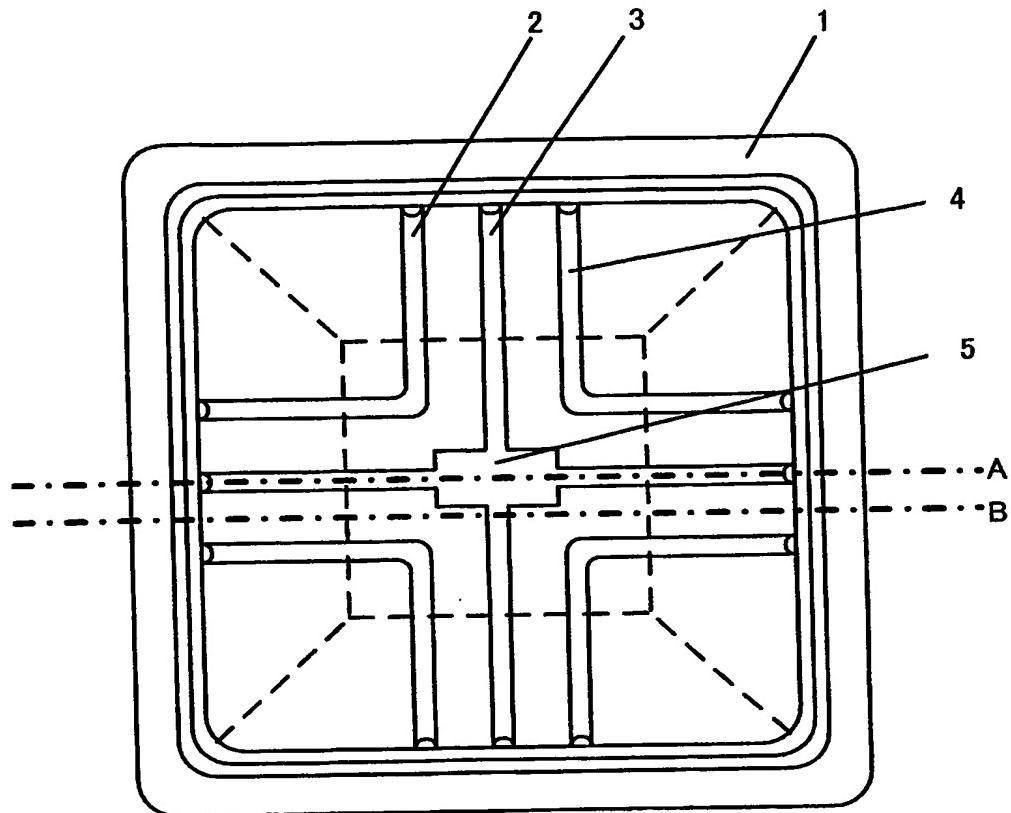
【書類名】 図面

【図 1】

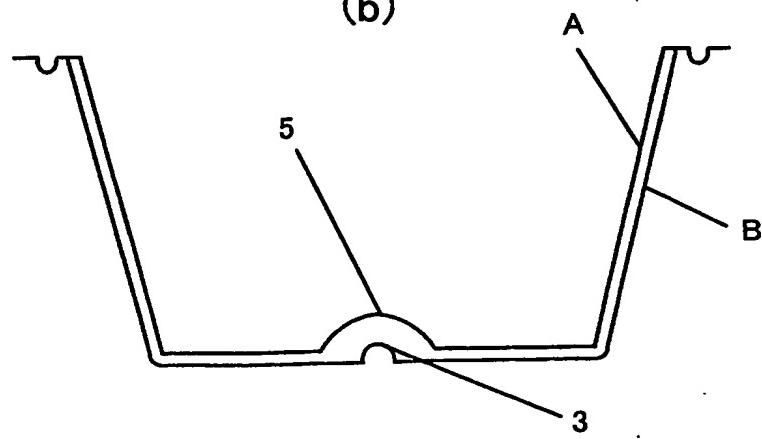


【図2】

(a)



(b)



【書類名】要約書

【要約】

【課題】

澱粉質の含有量が70重量%以上、好ましくは75～85重量%であり、生分解性に優れると共に、成形性も良好な、生分解性シート及び当該シートを用いた生分解性成型品を提供し、しかも簡易かつ経済的な製造方法も提供することである。

【解決手段】

澱粉質を70重量%以上含有する原料から、温度を120～140℃に保持しつつ成形してなる生分解性シートであることを特徴とする。また、該生分解性シートを、加熱真空成形することにより得られる生分解性成型品である。

【選択図】なし

特願 2003-116393

出願人履歴情報

識別番号 [503129464]

1. 変更年月日 2003年 4月 8日

[変更理由] 新規登録

住 所 宮崎県宮崎市小松台西一丁目5番地10

氏 名 橋本 健二